

顎の成長発育、発育異常について

初代～3代岡山大学歯学部長
初代日本小児口腔外科学会理事長

西 嶋 克 巳



■ 略歴

昭和 26 年 大阪歯科大学予科 3 年 修了
昭和 30 年 大阪歯科大学卒業
岡山大学医学部歯科学教室入局、助教授
昭和 35 年 医学博士
昭和 46 年 岡山大学教授
昭和 54 年 岡山大学歯学部教授 部長
昭和 61 年 岡山大学大学院歯学研究科長
平成 9 年 岡山大学長 定年

■ 現在

平成 12 年 日本歯科医療福祉学会名誉理事長
平成 12 年 日本小児歯科学会名誉会員
平成 14 年 日本口腔インプラント学会名誉会員

小児には成人を単にそのまま小さくしたものではなく、発育しつつある過程にある。そして小児を取り扱う場合、このことを念頭におき、予後考えた処置法を講じなければならない。

小児の下顎骨骨髓炎、顎関節疾患などにより顔面非対称となった症例。

顎骨骨折では咬合を考慮すると同時に未萌出永久歯胚、根未完成永久歯の存在、周囲軟組織の癒痕形成に対する影響を常に考慮しておく必要がある。下顎頸部若木(生木)骨折に F. K. O. を使用し手術することなく顎の成長発育治癒した症例。

先天異常では発音、咀嚼といった機能に対する影響と、小児の精神発達に及ぼす影響を考慮し、治療時期を選択する。術後も発音に関する機能訓練、矯正、補綴による審美的修復、鼻腔、唇形態の二次修正など長期にわたって経過観察。

一卵性双生児の唇口蓋裂の術後の発育、両側性唇顎口蓋裂術後の上顎発育不全、成人唇顎裂の顎発育、下顎前突症開咬の術後、外胚葉性異形成症の乳歯 2 本以外の欠歯、永久歯のすべてが顎骨内に埋伏していた症例。片側のみ萌出し他側が未萌出、埋伏している症例。小舌症、舌小帯過短症を伴った先天性下唇および下顎正中裂。左下顎枝発育不全および副耳を伴った横顔裂、右側下顎頭および下顎正中裂。左下顎枝発育不全および副耳を伴った横顔裂、右側下顎頭過形成による顔面非対称の観血的治験例、病的骨折を伴った下顎骨の進行性萎縮症。

嚢胞性疾患に対しては一応開窓療法を試み、その経過により二次的に嚢胞摘出術を考えた。

腫瘍については、左側下顎肉腫治療 10 年後にみられた歯、顎骨の発育不全。下顎頭を含めた下顎片側離断術後の骨新生、骨膜下顎骨離断後の骨折生、骨膜移植など供覧し、顎の成長発育、発育異常について、ともに検討したい。